昭和60年3月1日発行　(財)高知市文化振興事業団

文化高知 4

ふるさと高知

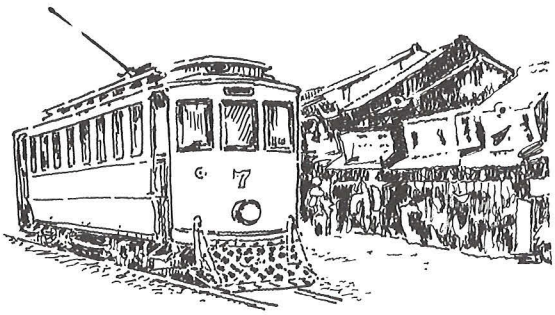
田中俊樹

私の所属する企業では、三月が新しい年度になるため、昨年の暮れから六十年度に向けた新しい営業政策が検討されていた。全国的に百貨店業を営む我々の企業にとって、今日の日本において生活者の共感を呼ぶ、最大のテーマは何か、と言うことで検討が重ねられ、得られたのが、欧米の文化スタイル偏重や欧米のスタイルの模倣でない「日本本来のくらし方、生活スタイル」「日本型の生活様式」を現代の視点から捉え直していこうということで、決定をみたのが「日本のふるさと」というテーマであった。

私達グループのもつ企業理念が〝平和で豊かな生活を希求する市民に役立つサービスの提供〟を目指している点から、ふるさとというテーマは、平和で豊かな生活を営む上で多くの人々の中にふるさとのもつ意味（私は文化、ないし文化的生活と理解しているが）が非常に重要になって来たと考えたからに外ならない。

いま、何故ふるさとなのかと言う時、二つの視点が考えられる。それは中央（都市生活）からみたふるさとと地方（地域生活）からみたふるさとである。

現代の都市生活にとって人の側面と街機能の側面で大きな問題が生じており、その中にふるさとのもつ意味が、都市の補完機能、都市生活の浄化作用、都市で失われたもの、再発見という観点から、都市生活の活力源として大きく見直されてきている。一方、都市生活者からそのように期待されている地域生活（ふるさと）はどうかと言うと、ここにも色々な問題を抱えている。大きな一つは過疎病であり、押し寄せる過疎化の波、家族の分散、地場・伝統産業の衰退等である。もう一つは都市病であり、自然破壊、個性のない〝ミニ東京〟的街づくり、悪しき都市感覚への迎合等の危険が考えられる。



「チンチン電車」　竹村晴夫

高知に住んで三年。徐々に〝ふるさと高知〟に根づいて来た自分として、今こそ、真剣にふるさとづくり（文化高知づくり）に取り組むべき時と思わずにおれない。

都市生活者のニーズをしっかりと見極め、その補完機能を果たすことは、もう一つの大きな地方の課題である経済面での活力を生み出す一助になると共に、自分達のためのふるさと運動を、やるべきこと、やってはいけないことをしっかりと見極め、目的を定めて実行していく必要があろうかと思う。

高知の大きな財産は、気候、風土と人である。毎日が青空と言っていい、つき抜けるような空の青さ、そこにはぐくまれた人々の気風。不便さや欠点は色々言われるが、それを補い、直すことはなかなか大変なことで、余り気にせず、優れている面をうまく活用し前を向いて大胆に進む方が事は早いように思うのである。仕事をしていて苦しいことや悲しいこと、疲れることが多い毎日だが、朝起きて見るこの空の青さは昨日のことを全て洗い流し、今日一日の活力を生み出し、勇気づけてくれるかけがえのないものである。

（とでん西武百貨店 代表取締役社長）

文化といのち

姫田忠義

私と高知（というより土佐）との縁は、第二次大戦末期にはじまる。土佐湾一帯に配置された兵員の一人として、終戦後までの半年余の間に、浦戸、御畳瀬、長浜と転住した。

当時私は十六才。少年ではあったが、一度ならず死を覚悟した。が、幸い生きて父母のもとに帰ることができた。

一生の間に、文字通り死を覚悟することは、そう何度もあることではない。少なくとも私にとっては、稀有の体験であった。そしてそのことが、私をして、土佐を第二のふるさとと感じせしめている。

その土佐の高知に、新しい文化創成の胎動のあることを伝えられ、この一文を寄せることになった。縁（えにし）の深さ、ありがたさを、改めて噛みしめている。が、浅学の私に、何ほどのことができるか。ただ、ふだん想い想いしていることの一端を、はるか離れた地から、風に托し、送りうるにすぎない。

そもそも文化とは何か。何を求めて、かくもにぎにぎしく世の人は文化を口にし、論じるのか。そう問う私自身が、民族文化映像研究所などと名づけた活動体を創り、ある種の作業をつづけているのだが、さてそのおおもとのところにある問いに対しての確たる答えは、私自身にもまだない。が、辛うじておのれに言い聞かせ、折りにふれてはひとさまにも話していることはある。少々固苦しい言い方ではあるが、それを記してみる。私なりの文化の定義、文化概念である。

文化とは、「与えられたいのち（生命）を支え、強めるための、有形無形の行為の集積である」。

二、三の註が要る。

一つは、私たちがもっているいのちは、自分がつくったものではなく、与えられたものだということ。誰が与えてくれたか。神か、仏か、あるいは祖先か。あるいはそれらを包括したいわく言いがたい宇宙的創造活動か。いまのところ私にはどれと言いがたい。が、与えられたという実感は確かである。

二つ目は、その与えられたいのちの活動は、常に一定の強さの状態で持続するものではなく、絶えざる強弱、盛衰、成育と死滅のリズムをもっていることである。個体としての一人の人間のいのちもそうだし、社会集団としてのムレ総体のいのちもそうで、さらにそれら人間のいのちのリズムは、基本のところで自然のそれと深く対応し、かかわり合っている。私たち人間は、そういう重層したいのちのリズムの総体のなかで生きているのだが、そのリズムの底にあるとき、あるいはリズムに狂いが生じたとき、私たちはそれを感得し、その恢復を願ってさまざまな努力をする。私の言う「いのちを支え、強めるための有形無形の行為」とは、そういう意味である。

私たち日本人のみならず人類は、古来、たえずそういう努力をしながら生きて来た。それぞれの民族のもつ伝統的な習俗や年中行事、あるいは昨今盛んになった自然保護運動や公害防止運動、さらには核兵器廃絶運動なども、そういう努力のすがたと私は見ているが、しかしさらに日常的なこと、例えば飯を食うことや眠ること、人と人が話し合うことなども、その努力のあらわれと言うことができる。飯を食うことや眠ること、あるいは人と人が話し合うことなどは、生きるということ、生存するということそのものであって、何もとり立てて文化の何のと言う必要はないかにみえる。が、では、ことの飯を食うということについて考えてみても、何を食うか、どのように調理し、どんな食器で、どのように食うか、などと考えて行くと、それはただ生きる、生存するという言い方では済まない次元のことをはらんでいる。人と人とが話すということにしても、どんな言葉で、どのように話すかなどと考えて行くと、これまた同じことが言える。つまりそれら最も日常的なことどもは、生きるということそのもの、生存そのものであると同時に、いかにも人間らしいそしてそれぞれの民族なり人間集団なり家族なり個人なりの特徴をもった、言うなれば文化的行為なのである。

もちろんそれを、文化的行為と呼ぼうと何と呼ぼうとかまわない。それは人それぞれの勝手である。が、敢えて私がそう言うゆえんは、昨今の文化論が、やゝもすれば最も基本な生きるということ、言いかえると生存の次元、さらに言えば生物次元から人間を考えるという最も大事なことを忘れているかに思えるからである。

数年前私は、吾川郡池川町椿山（つばやま）での記録映画『椿山―焼畑に生きる』を世に出した。人間の生存と文化の基本を、私はこの地で悟らされた。

（民族文化映像研究所所長）

若さと行動力

吉村浩二

幕末の志士達が、明治維新という時代の大転換を成し得たのは、若さと行動力に負うところが多い。

志士を代表する坂本龍馬の軌跡をみても、二十八歳で脱藩し三十三歳で悲壮な最後を遂げるたった六年の間に、京都を中心に大業のために全国を駆け巡り、まさに南船北馬、東奔西走を地でいっている。その行動力は当時の交通機関からして驚嘆すべきものであり、旅行家たちが遂げた明治維新ともいわれる所以である。

行動力を支えるのは若さであるが、その時代を回天せしめた人達の若さも、平均寿命の短かかった頃とはいえ驚く程若い。龍馬落命の時、その後明治政府の重臣となる人達の年齢は、薩摩の西郷隆盛四十歳、大久保利通は三十四歳、長州の木戸孝允三十四歳、龍馬に鍛えられた土佐の板垣退助、後藤象二郎は揃って三十歳、伊藤博文にいたっては二十六歳の若さである。また、龍馬が創った土佐海援隊の会計係として共に働き、これを継いで大三菱を築いた岩崎弥太郎は三十四歳である。こうした若さと行動力によって、近代日本の黎明期は推移していったが、忘れてはならないのは血気盛んな志士達が、いたずらに若さに溺れることなく、話し合いや議論の中から物ごとを解決していく怜悧な洞察力を持ち合わせていたことである。

現代の若者は物質的には恵まれているが、精神的には燃えていくものがないといわれる。しかし、現実を自分の目で見て行動するという優れた判断力や、主体的に社会参加したいというエネルギーは充分維持していることも事実である。

今年は龍馬生誕百五十年という記念すべき年であり、それに因んだいろんな催しも企画されている。この機会に行動を起こし参加することによって、現代の若者の若さと行動力と可能性を示してほしいものである。

（金高堂書店　取締役社長）

五台山にて　橋本初恵

たべもののはなし

片岡千歳

中学生の頃先生は「君たちに大事なことを教えておく、結婚する相手が同郷の者でない時は、たべもので苦労することを覚悟しなくてはならん」と言われた。山形の山村で生まれ育った私は、土佐で生活した時間が、はるかに長くなった現在も、先の先生の言葉を思い出すことが再々である。

はじめて土佐で正月をむかえた時、大皿にのせられた目をむいたさばの姿ずしはおそろしかった。野蛮なたべもののように思われた。今は大好きなもののひとつになったが――。

土佐に住んで間もない頃、釣り好きの家主さんが、生の鮎のブツ切りを入れたリュウキュウの酢物を小皿に入れて持って来てくれた時、自分はいかに郷里から遠く離れた土地に来たことかと実感した。私の郷里には生の魚と生の野菜を組み合わせた料理は皆無で、異文化を感じた。しかも鮎を釣った家主さんみずから料理したことにも驚いた。厨房に男が出入りすることも私には珍しかった。

一ヵ月ほど大方町にいたことがある。となりの奥さんは和裁をしていたが、中学生の娘さんが、二、三度小アジやイワシをのせたすしを持って来てくれた。海が近く魚が新鮮なこともあって、それは又実においしかった。「おかあさんは、忙しいのによく手の込んだおすしを作りますね」と言うと、すし種の魚の仕入れから一切はその娘さんがするのだときいて、眼鏡をかけたやせぎすの小娘が、にわかに立派な大人に見えたことだった。なにかと言えばすぐ私の郷里はお餅をつくが、土佐のすしは、山形の餅のようなものだろうか。

そう言えば土佐には「あの娘はスが効いちゅう」と言うような表現がある。土佐のたべものを一言で言えば「酢」につきる。それは柚子や酢みかんを産し、海に面した南の土佐の風土が、自然に到達した食文化だと思う。

残念ながら私はいまだに「酢」を手なずけることが出来ず、家族には、たべもので苦労することを覚悟してもらっている。

（タンポポ書店　営業）

こけしと彫り

中村繁治

私の子どもの頃、野市や赤岡辺りから米木地（木の浅いノミ彫りで、形は丸く、米を掬ったり、量を計ったりする物）や、椀とか、杓子などを売りに来る人たちがいた。また、上町にはロクロ細工の日月ボール（剣玉）を作る店があって、子どもたちはよくホーレン菓子を食べながらこれで遊んだものだ。今でも東北では作られている。帯屋町一丁目の私が生まれた家の真向いには、酒樽（人が何人もはいれる程大きな酒の仕込み樽）を造る大家があった。

この様に木を材料に生活用具などを作ったり、ロクロを挽く人たちは、遠く縄文の中期頃から数千年、狩猟から、木地師などへと、日本の脊梁山脈にそって各地を移動し続けた山の民の子孫の人たちが多い。生業は、主として木地師、マタギ、杣人、樽丸師、山窩などの日本の先住民であったが、大和朝の里人（野耕民）が入国以来、血は交り時の権力者の術策もあり、その多くが里人となっていった。だが、今も尚、集団で生き続けている人たちもいる。

四国の山の民は、剣山、祖谷谷を中心に四県にまたがっていた。高知へは物部川の上流や、西峯辺りから山越えで南下している。

せんだって、中国の雲南の奥地まではいった時、日本人のルーツを探れば西双版納の榛族に行き当たり、日本のお米はインド、ビルマ辺りから、その主都の景洪を経て渡来したという話を聞いたが、我々の祖先の山の民は大陸から、里人は南からやって来たと考えてみると現実性も浮かんで興味深い。

さてこけしだが、東北に行けば、津軽とか、鳴子、弥次郎、遠刈田、土湯など幾つもの木地師仲間つまりロクロ工人のこけし部落がある。この人たちの作るこけしには顔や形、色彩などそれぞれ特長があり古くから受け継いで系列化している。これらこけしは、一体いつ頃から出来たものだろうか。それにはお祓具から転化した信仰説や、玩具から始まったなど、いろいろの説がある。私はもともと幼児がもて遊び、ねぶっていたオシャブリ（木地師の作った簡単な丸い棒切れ）から木ボコ、木削子そしてこけしと次第に人形化され、赤や青や黄などの色彩を施すようになったものと思う。木ボコの歴史は千数百年前からとの説もある。

民芸と言う言葉は、大正の終り頃、浜田庄司、柳宗悦さんなどが、使い初めた言葉だが、それ迄は高級な工芸や美術品を上手物とよび、それに対し庶民的な生活用具の中での面白い物を下手物と言っていた。その下手物を民芸と呼ぶようになった。

こけしと言う言葉も比較的新しいものだが、各国にある木彫りとは異って日本独特のものと言っても過言ではない。それは、木彫りは刀彫りであるが、こけしはロクロ削りの生地に色彩を施したもので、根本的に相異がある。私も各地の民芸品や木彫りを見てまわっているが、僅かにキルギス（ソビエット）のロクロ人形を見た位で仲々見当たらない。

こけしは大きく分けて三通りあるが、東北で昔から出来ている伝統こけしには粗朴さと郷愁があり、近代こけしには創作意欲が感じられ、情緒と四季感が漂っている。雑こけしには玩具用が多く、観賞よりむしろ土産品に適している。

さて、それでは彫りのことだが、この世界には無限に広いものがある。古代から人間の住む所には必ず彫りがあり、人類の歴史が刻み続けられてきた。戦争も平和も、民族の興亡から、宗教も、文化も生活様式も、ほとんど彫りによって伝わっている。オーストリアで出土した三万年前のヴイレン・ドルフの石像はともかく、ナイルやシルクロードに行ってみても、又、ルーブルや大英などの博物館をまわっても、さながら彫りで埋まっている感じがする。

マコンディーの木彫り（タンザニア）

土偶から石彫り、象牙、金属類の原材も多く、俑から壁刻、建築、工芸品などあらゆる分野にわたっている。

王家の谷にはいれば、セティ一世でもラムセス九世でも、あらゆるファラオの陵墓に、玄室といわず、通路にも、総ての壁から天井まで一杯に石彫りに色彩が施され、あまりの見事さに圧倒されてしまう。ツータン・カーメンの棺や副葬品にみる彫りの技巧は言うに及ばず、カルナックやアブルシベルの神殿など、そこには素晴らしい彫りの世界がある。

西安の兵馬俑は個性的で物の見事に感情を表現し、昭陵の色彩俑もいくら見ても見飽きない。スキタイだってそうだ。あれだけの黄金の工芸品を作る技術が、三千年近く前の狩猟民のどこから生まれたものだろうか。

ミロのヴィナスだって紀元前四世紀頃作られたと言うが、よくもあれ位の均整のとれたうつくしい裸婦像が出来たものだ。

今世界的に評判のタンザニアのマコンディーの木彫りにも驚く。母系家族で、字も知らないような原始的な土人の線の見事な美しさ、ピカソさえも、彼等の彫りの流れる線からその画風が生じたと言うではないか。

一体、文化とは何んだろう。いかに文明や学問が進んでも、文化は追いついて来るとは限らない。やはり文化とは、伝統と心の問題ではなかろうか。

こんな事を考えていると、ひょいと、オペラ座のガス灯の裸婦像を見に行きたくなった。今すぐパリに飛べればよいが、アルバムでも見て我慢することにしよう。

（日本近代こけし作家協会顧問）

土佐手すき和紙の偉業を讃えて

鈴木喜久子

二一世紀にむけて、世界の科学の最先端を一堂に集める「科学万博―つくば'85」の迎賓館に、なんと、手すき和紙がつかわれるとのことである。

この装飾を担当した伊部さんは、そのことについて大要をつぎのように語っている。

「日本は楮、三椏など和紙の原料が豊富で、そのうえ良質の水に恵まれていたために、古くから和紙づくりが盛んでした。手すき和紙は、人間の手を水にさらしながら原料を繊維にほぐし、水の流れを利用しながらすきあげるものです。美しい紙をつくるには、いじわるなことに寒さの厳しい冬がもっとも適しています。それは人間の限界ぎりぎりの、ことのほか厳しい手仕事というべきものです。

つまり、手すき和紙は、ものをつくる原点でもあるわけです。そんな意味からも、これからの時代をつくる科学万博の迎賓館の壁紙には、手すき和紙がふさわしいのではないでしょうか」

藍で濃淡に染めあげた六千枚の手すき和紙の壁紙は、エレクトロニクスなど先端技術産業とはまさに絶妙のコントラストというほかはない。

さて、話を土佐和紙に移そう。

土佐和紙の起源は、いくつもの説があり、それぞれに一定の根拠もあるようだが、その年代や発祥の地はいまだ定かではない。

『土佐日記』を書いた紀貫之が国司として入国し、製紙業を奨励したとする説は、平安文学を謳歌したいろいろの書物が、もしや、土佐ですかれた紙に書かれたのではないかという夢から出たものであるようである。しかし土佐和紙が、醍醐の朝の延喜式献上品としてその名を連ねているところから、それ以前に紙すきがおこなわれていたことは、どうやら事実といえそうである。

のちに、土佐七色紙が徳川幕府への献上品になるが、幕末の頃には紙の産地として土佐の名は全国に知れわたるまでになった。

現在、手すき和紙は機械すきに、そして和紙は洋紙にとってかわられるが、それでも、いま手すき和紙業者は県内に六〇戸ちかくある。その八割が伊野町と土佐市高岡町など、仁淀川流域に点在している。

楮、三椏は高知の気候風土に適し、その需要が減った現在においても栽培の研究がすすめられ、なかでも楮の生産量は全国の四割をしめている。

また、簀、桁などの紙すき用具の製作者は、三分の一が高知県に在住している。とりわけ、もっとも基本的な用具であるヒゴをつくることのできる人は、最早や、高知県だけになってしまった。

じつは昨年わが家を繕った際、思いきってカーテンを全部障子にとりかえた。昭和五十八年、民芸館展に入選した高知の手すき障子紙〝桂月〟を、何とか、日々の生活のなかにとりいれてみたかったからである。案の定、障子を通る日の光の穏やかさは、何となくわが家の文化度を高めた思いさえする。

ところで日本民芸館展というのは、「伝統的な手仕事の保存と、新しい生活工芸の発展をはかるために、くらしに役立つ健やかな工芸品の出品を募って、展示・紹介し、普及することを目的」とした日本民芸館と日本民芸協会による、文化振興事業の一つとして毎年おこなっているものである。

今年度は高知県手すき和紙協同組合が出品した薄葉雁皮紙をはじめ、五点全部が入選した。そのうえ「協力製作の成果の著しい集団」にたいしておくられる、日本民芸協会賞も受賞した。

厳しい自然条件のなかで、盛衰をくりかえしながら育まれてきた土佐和紙が、このようにその共同の製作の努力が評価されたことは、和紙にたずさわる人々だけでなく高知県民全体にとっても、大きなプレゼントといえよう。

ことのついでに、土佐にはこんな紙すき唄のあることも紹介しておこう。

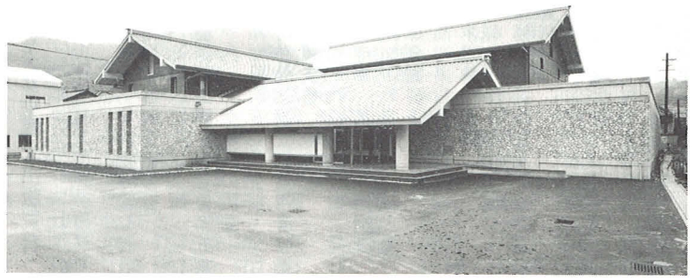
〈　伊野のテング（典具）は
　テング（天狗）じゃ出来ず
　ホイショドッコイ
　あつい人情で薄く抄く
　ホイショドッコイ

これは土佐清帖紙とともに国の無形文化財に指定された典具帖紙の産地、伊野の紙すき唄である。

そして、三月二日、この地に建設される土佐和紙伝統産業会館がオープンする。土佐和紙をいとおしむ全国の人人の交流の場に、必ずやなるにちがいない。

静かに流れる仁淀の川面に、土佐手すき和紙の明日への思いをこめて。

（高知県民芸協会　事務局長）



土佐和紙伝統産業会館（伊野町）

手しごと一筋

表具師　石川良治さん（上町一丁目）

文　西岡寿美子
写真　岡崎禎広

時代小説を読んでいると「経師屋―きょうじや」というものが出てくる。経師というからには経文と関係があるのだろうが、一体何を商う店だろうと、かねがね不審に思っていた。表具屋のことだそうである。もともと、写経を経巻に仕立てたところから名付けられたものらしく、現在でも数のすくない珍らしい職業の一つだが、室町時代から呼び習わされていると聞けば、必要から生まれた、なかなかに由緒ある職業であることがわかる。

表装、表潢（こう）などと呼ぶのはわかるが、「へうほうゑ」というのを最初に聞いた時は驚いた。へう（表）ほう（補―布）ゑ（絵）―表補（布）絵―と漢字を当てなくては、何とも理解できない奇妙なことばである。仏画、頂像（ちんぞう―禅宗の高僧の肖像画）、偈（げ―同宗の仏徳や教理を讃える詩文）、書、画、ふすま、障子等の補装、装飾という作業の実態を、ずばり表現しているのである。

表具師、石川良治さんは明治四十二年生まれだから、来年は喜寿になる。いつお訪ねしても、丁度裁板くらいの座高の作業台に向かって、水刷毛を使ったり、裏打ちをしたり、金欄の裂地を取り合わせたり、物差を当てて和紙を裂いたりしておられる。仮張りをパリパリとはがしてきて、折りをつけ、裁ち、ノリ刷毛でどこかを撫でていたと思うと、はや総裏が打たれて、作品がまた張板に還ってゆく、というような場面にも出会う。

しごとは、素人目にも非常に早い。伸ばす、曲げる、星（印）を打つ、裁つ、継ぐ。いささかも停滞がない。作業台の上を、作品が右に左に、縦に横に、表に裏にと動く度に、刻々にかたちが整ってゆく。手とモノが瞬時も離れず、一つに溶け合って「舞う」のである。そのリズミカルな作業ぶりは見ていて快い。

これだけの手練は天性のものもあろうが、くり返し、くり返し、くり返し、何万回、何十万回の習熟が生んだものであろう。百六十センチ、四十五キロの軽量で、人よりもキャシャな指先から、六万点の表装を世に送り出した人である。身ごなしの平滑さ、自在さも、無理と無駄を極度に削ぎ落した末の機能美なのであろう。

石川さんは表具師二代目、生まれながらの家職である。技の師も、人間としての師も、「親父じゃ」と、はっきり言い切る。父、光太郎さんは名人肌の職人で、世事を構わず、日に二円の食い扶持がいるのに、二十銭のしごとを入念に仕上げて、「よう出来た」と満足するような人であった。糊口のためにハカをゆかすということの出来なかった人で、内緒の苦しさから、四男を置いて妻に去られた。良治さんが小学校六年生の時であったそうだ。生活と節操の相剋を石川さんが心に刻んだのはこの時である。

いま、石川さんの手さばきの鮮かさを見て、それでは、表具のしごとに人を魅了する華麗さやロマンがあるかといえば、それは創造の部門だから全くないとはいえないが、大方は工程に追われてロマンどころではない。それどころか、これくらい地味で辛気くさく、孤独で、忍耐を強いられるしごともなかろう。しかもどんなに見事にしおおせても、表に出ることのない「黒子」の世界である。

一旦作業台に向かえば、乾きを案じて夏でも冷房は入れず、むろん冬の暖房はしない。伸（のし）たり、貼ったり、叩いたり。水と、ノリと、紙と、裂地―材料とも格闘なら、頼んだ人との摩擦もある。来る日も来る日も神経の休まる時とてない。

そこで、ウックツした精神は発散するところを求めて噴出する。石川さんも、酒はのまないが、「打つ、買う、はやったものよ」と笑う。有名な石川さんの「武者修業時代」は、「打つ、買うの借銭で、高知に居れんようになったのよ」というから、相当なものらしい。二十七歳から二年間、京、大阪、紀州へ、あそこに十日、ここに三月、三十軒の同業を流れ歩いて腕を磨いた時期のことである。無頼と遊蕩。折から昭和元禄のモガ、モボの時代を、長髪、コーヒー、左翼系の本をふところに、肩で風を切ったいなせな石川さんの青春が見えるようである。

夫人とのなれそめを聞けば、「いつ結婚したかじゃいうて聞いてくれるな。そいつが一番困る質問じゃ」といわれる。高知から宿毛へ、乗物もない時代に通うた石川さんも石川さんだが、「どうしてくれるか」と聞きもせず、前後十余年を黙って迎えた夫人の心もいじらしい。

支那事変から第二次大戦へ、昭和十年代に入ると時代は急速に暗くなる。奢侈統制令で表具とカザリ職は差し止め。店を閉め、宇治電へ徴用工として六ヵ月勤める。昭和十六年には三十二歳の石川さんにも赤紙がくる。丸亀の連隊に入隊しその年満州の東寧へ。翌十七年極月にはラバウル。零下十五度から攝氏三十五度まで、実に五十度の温度差を移動したのである。十八年には爆撃をうけて乗船が沈没し、十八時間の漂流の末パラオへ。最後はルソン島。雨期の密林をマラリヤと飢餓の逃避行の果てに、終戦も知らずアメリカ軍の捕虜となる。二十年九月のことであった。捕虜番号一一三七八〇は、石川さんの生涯忘れ難い数字である。

昭和二十年十二月二十五日、広島県大竹へ復員した時は、体重わずか三十四キロ。風に吹かれてもよろめくマラリヤ持ちの病体を、宿毛の料亭で働きながら「朝風呂、丹前、長火鉢」で、四年間養ったのが夫人である。この時代を「ヒモの暮らし」と石川さんは表現するが、いくさの傷も、男としての傷も、大きく包んで癒したのが夫人ではなかろうか。

二十四年、身心ともに回復した石川さんは、宿毛から自転車を漕いで帰高する。現在地へ居を定め、ほぼ十年ぶりに刷毛を握ったものの、まだ半ば赤むけの焼土、配給物資の高知市である。なまやさしい出発ではない。幸い翌二十五年の南国博を契機とし、戦後復興と県展の隆盛期に乗ったこともあって、「せめて日に卵一つ、リンゴ一個くらい食べれる暮らし」を、と嘆いた夫人に、以後生活不如意の思いはさせていない。幼い日に母に去られた父の無念さも、去った母の辛さも、四年間の夫人の献身も、石川さんは忘れていなかったのである。

表具のしごとにも適性が必要だろうか。「鈍でよろしい。要は人間じゃ」と石川さんはいわれる。立派な三人の後継者を育てておられるが、その育て方も一風変っている。最初に、忍耐力、誠実さといった、人間の基本的な性格は見るが、出退は自由、雇傭関係も師弟関係もなし、というのだから、成るも成らぬも本人次第である。四年間のしごきに耐えられなければそれまで。やる気があれば惜しみなく伝える。無事修業すれば独立させ、三年間はしごとの保証もした。修業中は助手に、仕上がればお礼奉公をさせるこの社会で、何と明朗で近代的な養成型態だろう。それでいながら腕ひとつで世の中へ出る若者への、人生の先達としての、何という暖かい餞（はなむけ）だろう。さすが名工のしごきに堪えただけあって、今は三人ながら師をこえる盛業である。石川さんの展覧会ともなればこの三人が忍者のように出没して、設営に以心伝心の早わざを披露する様は、一寸やそっとでは見られぬさわやかな人間模様である。

ただ、悩みはある。いま修復にまわってくるのが、何百年の時代ものではなく、実に明治期以降の、この世界では新品とされるものである事実である。シミ、歪み、切れ。無惨な傷のすべてが、製紙工程で加えられた苛性ソーダによると知ったとき、いかに個人が作品の保全に意をつくし、意匠、感覚をこらしても、現代の機械文明、化学文明の毒には勝てない。百年後に真価を問われて恥じない技量も、見せかけは美しいがその実劣悪な紙質に裏切られることを思うと、泣くにも泣けない無力感にとらえられる、と石川さんはいわれるのである。

ことは紙だけではない。心して聞くべき警告ではあるまいか。

昭和五十九年郷土出版資料
公的団体の歴史刊行物

田村地区排水対策特別事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
高知県教育委員会編・発行

土佐国衙跡発掘調査報告書第五集
―堂ヶ内・クゲ地区の調査―
高知県教育委員会編・発行

土佐国府跡発掘調査測量用骨格基準点設置報告書　点の記
高知県教育委員会編・発行

秦泉寺廃寺跡　第三次発掘調査
高知市教育委員会編・発行

芳原城跡発掘調査報告書
高知県教育委員会編・発行

銀杏の木遺跡の発掘
本山町教育委員会編・発行

田村遺跡群発掘調査及び保存運動関係資料
田村遺跡を保存する会編・発行

佐川史談　霧生関　（逐刊）
佐川史談会編・発行

史談くぼかわ　（逐刊）窪川史談会

土佐山田史談　（逐刊）
土佐山田町史談会編

（改訂増補版）索引・土佐史談
高知市民図書館資料係編

（索引）朝倉の歴史研究
朝倉の歴史を記録する会編・発行

大平山　（逐刊）
三里史談会編・発行

海南史学　（逐刊）
高知海南史学会編・発行

梼原史談　（逐刊）
梼原史談会

秦史談　（逐刊）
秦史談会編・発行

土佐史談　（逐刊）
土佐史談会編・発行

高知県中世城館跡分布調査報告書
高知県教育委員会編・発行

山内家史料　幕末維新　第六編
―第十六代豊範公紀―
山内家史料刊行委員会編
山内神社宝物資料館発行

土佐町史
土佐町史編集委員会編
土佐町発行

越知町史
越知町史編纂委員会編
越知町発行

中村市史　続編
中村市史編纂委員会編

土佐州郡志（下）　石川計等編
土佐史談会発行

野市の史跡
野市町文化財保護審議会編
野市町教育委員会発行

中土佐町史料
坂本正夫編
中土佐町教育委員会発行

土佐藩法制史料　憲章簿2
山本大等編
高知県立図書館発行

高知市の城跡
（高知市文化財調査報告書四）
高知市教育委員会編・発行

高知県中土佐町久礼城跡
中土佐町教育委員会編・発行

大川村の文化財
大川村編・発行

馬路村の文化財―金林寺薬師堂―
馬路村教育委員会編・発行

南国市文化財めぐり案内　改訂版
南国市文化財審議委員会編
南国市教育委員会発行

高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書　―姫野々上町・新土居宇津ヶ藪・永野遺跡―
葉山村教育委員会編・発行

高知オン・ステージ

創造性を培う幼児のあそび研究発表会

からだを動かすことは、人間にとって日常の生活と切っても切れない関係をもっているもので、心の動きや内面的なリズムが、からだを通して外にあらわれるものです。幼い子どもも、からだを動かすことが大変すきで、全身をつかって自分の気持を表現します。

このことを大切にし、リズム遊びを通して乳幼児の創造性を培っていくことを目的として、昭和五十七年につくったのが、「幼児のあそび研究会」です。

この研究会では、子どもの自発性を大切にする保育の中で、まず保育者自身の伸びようとする姿勢の大切さと、乳幼児が保育者のすべての動きや生活を吸収して成長していくことから、保育者自身が人間として磨きをかけ、美しくリズミカルで豊かな表現力を身につけることをめざして〝動きの基礎〟〝表現の基礎〟〝こころの表現〟を中心に勉強をしています。

見た目よりもはるかにむつかしく厳しい練習ですが、歩く、走る、とぶことから手の打ち方での心の表現など、一つ一つのこまかな動きの大切さに加え、心と動きは一つであることを学んできました。

第三回高知オン・ステージ

東京から堀合文子先生に度々指導に来ていただき、一年ごとの練習の成果を発表する意味で『高知オン・ステージ』を毎年開いてきましたが、この一月に開催した第三回も成功のうちに終わることができました。

さらに第四回へと積み重ねていき、子どもたちの生活の中で、少しでも美しい動きができることをめざしています。興味をもってくださる方の参加を待っております。

（浜口栄子）

連絡先　電話　(60) 0140

三里史談会のこころ

坂本　一定

三里史談会が発足して満三年になる。当初三十人足らずの会員が、今では二百人近くにもなっている。機関誌『大平山』の発刊も、この春で六号を数えるところまできた。まだ足腰は丈夫ではないし、歩みものろいが、どうやら、そのありようがふるさとのあちこちに根付き始めた気配が見える。願わくば、その根が広がって、あすのふるさとづくりの大きな心の支えになってもらいたい、と切に思う。そのこころを求めて、三里史談会は発足したのだから―。

むろん、時が変われば人も変わる。早い話、戦後の三里は、浦戸湾の埋め立てで、地勢も環境も急変した。このうえ、高知新港が実現すると様相はまた激変する。それに伴う地殻変動は、三里の人のこころまで根こそぎ揺り動かさずにはおかないだろう。

しかし、と私は思う。どんなに様子が変わっても、三里には三里の地下（じげ）のこころがあるはずだ。そのこころが伝統をつくり、人をはぐくみ、三里の歴史を刻んできた。そういう精神風土が、土佐水軍を発祥させ、造船産業をおこし、全国に名だたる園芸発祥の地として、ふるさとを位置づけたのである。

機関誌『大平山』

そのこころの源流を探りたい。そうして、その源流に新しい生命を吹きこんで、次の世代に語り継いでゆくことが史談会の役割りではなかろうか、と私は考えている。

（高知市三里史談会会長）

連絡先　三里小学校内　三里史談会　電話　(47) 0271

池城跡探訪会

食は土州にあり

安藤　禎彦

私たち郷土の食文化をいまいちど見直してみませんか―。

政治、経済、文化などあらゆる面で中央集権的きらいがあるが、地方には地方独特の良さと魅力があり、食文化はその一つと言えよう。

伝統食品をみなおす会は、高知に根ざした食品を守り、育てようと市内の料理店や乾物店、菓子店など二十店で昨春結成した。そして第一回伝統食品をみなおす集いを同年十月一日、高知大丸五階のレストランにおいて開いている。

集いのきっかけは、東京日比谷図書館で見つかった『割烹授業日誌第二輯』で、高知県尋常中学校女子部（現県立丸ノ内高等学校の前身）の卒業生が編纂、明治二十六年発行された料理の手引書でゴボウの煮つけ、タケノコの木の芽あえなど家庭の惣菜から、当時のハイカラ料理であった鳥肉のシチューやコロッケまで百種類にあまる献立が紹介されている。「これこそ今よく言われる健康食、自然食のもの」と感心し、会員一同そのまま献立を再現したのである。

土佐の山海の幸をたっぷり生かした昔の献立を実際に食べて、その良さを再認識してもらうと同時に地場産品の育成に一役買えば、と願っている。

辛苦甘酸鹹、まさに「食は土州にあり」である。

（伝統食品を考える会会長）

連絡先　中納言　電話　(22) 2266

ホールとギャラリーと喫茶と

ZUM ZUM

文化活動の発表と交流の拠点として作ったのが三年前の夏で、劇団RKC劇場が「椅子」という芝居でこけら落としをしてくれました。小さいながらも、ホールとギャラリーと喫茶が一つの建物にあるため活発に利用されています。

ホール（四十平米）は音楽活動、活け花や木彫りなどの教室、ダンス、展示、各種会合などに使われています。今後は、暗幕を張って映画の上映をしたり、主催事業で詩の朗読会を手掛けたいと思っています。

ギャラリー（十五平米）は、写真、絵画、陶芸、手工芸などの展示に使われてきましたが、今年の正月から、特色を持たせ、立体作家の常設個展の会場としました。これは二週間交替で個展を開くもので、三月から四月にかけては岡村二美（二月二十五日～三月十日）、門田修充（三月十一日～二十四日）、狩野信児（三月二十五日～四月七日）、北泰子（四月八日～二十一日）、信田英司（四月二十二日～五月五日）の予定です。ご期待ください。

最近、市内のあちこちや、須崎、窪川、中村などに同種のギャラリーが続々誕生しているのは心強い限りです。

喫茶はホールやギャラリーの利用者や県民文化ホール、中央公民館の流れ客が集まり賑わっています。休息ばかりでなく、意見交換や批評などが盛り上がるのは、聞いていても楽しいものです。

地道に、無理をせず、できるところから、一歩、一歩進んでゆきたいと思います。

（浜田憲次郎）

入交京子個展（撮影：高崎元尚）

連絡先　喫茶ZUM ZUM　電話　(22) 0500

風伯

目立たぬ存在のものに

戦後しばらくは、なんでもアメリカ尊重で、日本的なものはなにもかも駄目という感じだった。食うものは洋食が栄養があり、日本食はダメ、住宅は洋風がよく日本風の畳の生活は野暮、ものの考え方や子どもの教育、ファッションから生産方式までなんでも向う流のハイカラさが歓迎された。それが結果としてよかったかどうかは、いまは問わない。

だが最近は様子が大きく変わってきた。食事についても、日本食のバランスのよさがアメリカで評判になり、それによって日本でも日本食への回帰が叫ばれたり、日本流の経営の優秀さを、逆にアメリカから視察に来たりしている。

ふるさと回帰も、そうした時流のひとつである。このころ各地でお祭りが盛んになってきているが、昔は野蛮そのものように見られてきたハッピに足袋ハダシという姿が、今ではむしろハイセンスのものとして若者に受け入れられている。もうすっかり、土佐のまつりから日本のまつりになってしまった、ヨサコイ鳴子踊りの衣裳をみても、そのことがよくわかる。

こういうものを見ていると、日本の自信の回復や、ふるさとの風土の中で磨きあげてきた日本の生活文化の原型のたくましさを感じる。

いまの時代は、ただただ時流に乗ることが求められるが、目立たぬ存在のものの中にあるこうしたものをこそ大切にすべきである。地方における文化振興の原点もそこにあるように思う。

（華）

東京砂漠の芽

少し前までは東京の人間社会というものが地方に住んでいてもまだ理解できる面が多かった。今日もその文化的表層面は視覚としては伝わってきて一見華やかに映じている訳だが、それなら東京の本質が、人間が、どうなってきているかといわれれば、もはや摑みどころが判らなくなった感がする。恰度東京に飛び立たしてしまった吾子が理解できなくなったと同じようなもどかしさがある。

東京で学術面にたずさわっている一友人の話に、この頃東京の四十代のジャーナリストの間で、もう一度、東京を回復するためにはどうしたらいいか、ということが云われ出してきているという。勿論精神面の話である。そして、その眼目となるものは儒教のなかの「孝」の思想ではないか、という結論めいた考えに行き当たっているという。「孝」の思想がやはり現代も基本になるということらしい。ただしこの考えは彼らのなかから生まれたというより、現在の近代中国の政治理念のなかに据えられていることだそうで、その示唆によるところが大きいとのこと。国家も人間もやはり「孝」の思想のなかに在ったということらしい。ところでこの考え方は、早く日本にも存在した。大正時代のことだが、「日本民俗学」を確立した柳田国男翁が当時云うていたそうである。

いずれにしても現代の日本社会を考える上で、もう一度意識し直す可き原理ではあるまいか。東京砂漠のなかで、そうした考えが蘇ってきていることに注目したい。

（旧人）

高知市都市美デザイン賞

財団では、新しい都市美の創出に寄与していると認められる建築物や建造物を顕彰するために「高知市都市美デザイン賞」を設けました。これは都市デザインへの関心と水準を高め、個性豊かで魅力ある街づくりを目的とするものです。この制度の概要は次のとおりです。

○顕彰の対象

高知市内につくられた建築物や建造物で、そのデザインが優れ、周辺の景観づくりに好ましい影響を与え、都市美の向上に著しく寄与しているもので、つぎのいずれかに該当するものを対象とします。

(1) 新しい都市美創出のモデルとなるもの

(2) 壁画・彫刻・その他これに類するもので文化的、芸術的環境を造り上げているもの

(3) 総合的に計画された建築群で良好な街並みの景観を造り出しているもの

(4) 周辺地域のシンボルとなるもの

なお、建築物や建造物の範囲としてはつぎのものを考えています。

ア、住宅、店舗、工場、ビルなど一般建築物（公共建築も可）

イ、生け垣、並木、広場、庭園、公園など

ウ、壁画、彫刻、門、モニュメントなど

エ、道路、橋など

○顕彰

顕彰は、高知市都市美デザイン賞の特賞、入賞の建築物や建造物に対して行い、発注者に表彰状と表彰銘板を、設計者に表彰状と副賞を授与します。

適当なものがなければ表彰しない場合があります。

○選考

推薦を受けた作品について、県内および中央の都市計画、建築、文化等の各分野の専門家、学識経験者で構成する選考委員会で、厳正に選考します。選考委員の氏名は公表しません。

○応募方法

自薦、他薦は問いませんが、つぎの書類の提出が必要です。

(1) 高知市都市美デザイン賞推薦書（所定の様式による）

(2) 推薦物件のわかるキャビネサイズ以上のカラー写真（2枚以上、位置を変えて写したもの）

(3) 推薦物件の形態、構造のわかる平面図と立面図（青焼きのもので可）

第一回の募集については三月二日に推薦の受け付けを締め切り、三月末日に結果を発表する予定です。

第二回についての推薦受け付けは来年になりますが、今年一月一日から十二月末日の間に高知市内でつくられる建築物や建造物が推薦の対象となります。新しい都市美創出のために今後つくられる建築物、建造物を期待したいと思います。

表彰銘板のスケッチ

高知の映像コンテスト

入選作品の展示

場所　市役所1階ロビー
期間　3月4日(月)～3月16日(土)
〈但し、14日(木)は都合でみれません〉
時間　午前8時半～午後5時まで
〈土曜は半日、日曜は休みです〉

あとがき

▼梅の花も咲きほころび、財団の初年度の三つの公募事業も大詰めに入りました。

▼「高知の映像コンテスト」には、写真部門百十七点、ビデオ部門十七点の応募がありました。カメラがとらえた郷土の優れた景色や風俗や事象が記録されています。

▼「龍馬のうた」には大反響があり、二月九日の歌詞の締め切りまでに、三三二篇の応募がありました。その六割は県外からの応募で、北海道から九州まで全国各地にわたる龍馬の人気の幅広さ、すごさがよくわかります。また、寄せられた曲をもとにして、龍馬音楽祭を開催してほしいというアマチュア・グループからの声もあり、夢はふくらんでいます。

▼「高知市都市美デザイン賞」は、発表と同時に、要項を取りにこられる方がひきもきらず、従来こういった建築関係の賞がなかっただけに関心の強さがうかがえました。この制度が高知市の風格と個性づくりのステップになれば幸いです。

▼以上の事業に共通するものは、郷土を見直して活力を呼び起こし、未来を模索しようとする視点です。この視点が行動に結びつき、組織化がはかられ、郷土が活性化することを願っています。

財団法人　高知市文化振興事業団
〒780　高知市本町五丁目一番三十号
TEL　〈〇八八〉㉓四三六五
郵便振替　徳島8-14869